

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	石田 礼以菜
主 論 文 題 名：				
江戸時代前期の作家と絵師の研究				
(内容の要旨)				
江戸時代前期は、木版印刷技術が普及し、出版文化が多様化した時代であった。写本では、御伽草子などの物語を題材とした、彩色された絵入りの豪華な絵本・絵巻である奈良絵本・絵巻などが制作され、版本では、江戸時代前期の京都の作家である浅井了意の『御伽婢子』などに始まる仮名草子や、江戸時代前期の大坂の作家である井原西鶴の『好色一代男』などに始まる浮世草子などが制作されていた。奈良絵本・絵巻の制作背景は、近年まで不明であったが、石川透氏の『奈良絵本・絵巻の生成』（三弥井書店 二〇〇三年）や、『奈良絵本・絵巻の展開』（三弥井書店 二〇〇九年）などによって、それらは、浅井了意や、江戸時代前期の京都の女性書家・作家・絵師である居初つななどの人物によって制作されていたことが明らかになった。これは、本文の筆跡や絵の鑑定によって明らかになったことである。近年では、中世文学において、奈良絵本・絵巻などの絵画資料を参考とする研究も増えている一方で、近世文学においては、作品の本文や書誌などの研究が中心であり、仮名草子・浮世草子における挿絵などの絵画資料を参考とする研究は、水谷不倒氏の『古版小説挿画史』（大岡山書店 一九三五年）以来、ほとんど進んでいないという問題点がある。そこで、本論文では、江戸時代前期の写本・版本における絵画資料に焦点を当て、作家と絵師などの関係を通して、作品の制作背景をより具体的に明らかにすることを目的とした研究を行った。 当時の作品の制作背景を明らかにするために、本論文では、江戸時代前期の京都の絵師である吉田半兵衛という人物を中心に上げている。この人物の名は現在ではあまり知られていないが、当時は、「江戸の菱川、京の吉田半兵衛」というように、浮世絵の元祖として有名な、江戸時代前期の江戸の絵師である菱川師宣と並び称されていた人物である。宝永六年（一七〇九年）刊の、当時の商人の致富譚を記した浮世草子である『子孫大黒柱』第二巻第五話「心と書おほえたる富貴草」に、吉田半兵衛の半生についての記述があり、これによると、肉筆画が中心であった当時において、安価で大量生産が可能な版画を流行させたといい、水谷不倒氏の『古版小説挿画史』では、貞享三年（一六八六年）刊の『好色五人女』『好色一代女』や、貞享四年（一六八七年）刊の『男色大鑑』などの井原西鶴の作品の挿絵を描いたともされている。また、先行研究において、画風の類似から居初つなの師であったとも考えられている。このような、吉田半兵衛と他の絵師・作家・書肆などの周辺の人物との関係を通して、江戸時代前期の出版界の構造を明らかにすることを試みている。 本論文の構成は、以下の通りである。 第一章の「はじめに」では、国文学においては、作品の本文や書誌などの研究が中心であったが、絵画資料を参考として、作品の制作背景をより具体的に明らかにしたいと				

いう本論文の目的について述べ、江戸時代の浮世絵師についての先行研究を概観している。

第二章の「吉田半兵衛の画業について」では、江戸時代前期の京都の絵師である吉田半兵衛の経歴および署名がある作品を整理している。吉田半兵衛については、水谷不倒氏の『古版小説挿画史』以来、ほとんど研究が進んでいなかったが、宝永六年（一七〇九年）刊の、当時の商人の致富譚を記した浮世草子である『子孫大黒柱』にその半生が記されており、これらの当時の文献から、吉田半兵衛は京都の四条通にある八坂神社御旅所付近に住んでいたと考えられることを指摘した。また、筆者が新たに紹介した、正徳二年（一七一二年）刊の、『太平記』に仮託して、登場人物が酒の飲み比べを行うという内容の浮世草子である『傾城盃軍談』を含め、現在、作品中に吉田半兵衛の署名などがあり、吉田半兵衛画である可能性が高いと考えられる作品は、全部で八作品あることを指摘した。そして、『傾城盃軍談』には、刊記に「画師 巻飾堂」という署名と、「吉田氏」「孝賢」という印記があることから、吉田半兵衛の本名は吉田孝賢であり、巻飾堂という絵所を営んでいたことが明らかになった。なお、水谷不倒氏が『古版小説挿画史』で、吉田半兵衛は、元禄五・六年（一六九二・一六九三年）に隠遁もしくは逝去したと考察しているが、江戸時代中期の京都の僧である玄璠の漢文集である「雲堆雜著」（国立国会図書館蔵）「白慧法師墓誌」に、「洛陽の書賈仲邨富平・画工吉田孝賢」が「多年法師（筆者注：江戸時代前期の京都の作家である坂内直頼のこと）の顧盼を獲」たので、玄璠に墓誌の撰文を依頼したことが記されており、これには享保四年（一七一九年）の奥書があるので、この年までは生存していたと考えられる。江戸時代前期の版本の挿絵は、江戸版は菱川師宣画、京都版は吉田半兵衛画であることが多い。菱川師宣は丸みのある描線、吉田半兵衛はやや形式的な描線であることが特徴だが、これは、各地域で好まれる画風が異なったからであると考えられ、江戸時代の版本の特色といえよう。版本の挿絵を見ることで、ある程度、その作品が刊行された時代・地域が特定できるので、今後の研究に役立つということを指摘したい。

第三章の「蒔絵師源三郎の画業について」では、江戸時代前期の蒔絵師であり、版本の挿絵を描いた絵師でもある蒔絵師源三郎の経歴および作品を整理している。蒔絵師源三郎は、元禄三年（一六九〇年）刊の、当時の職業について図解した事典である『人倫訓蒙図彙』の第三巻末尾に署名があることからその名が知られており、『人倫訓蒙図彙』の第一巻～第二巻は吉田半兵衛に似た画風であることから、水谷不倒氏の『古版小説挿画史』では、吉田半兵衛の弟子であると考えられていた。しかし、水谷不倒氏の『古版小説挿画史』における、蒔絵師源三郎は奈良に住んでいた人物であるという考察は誤りであり、『人倫訓蒙図彙』を刊行したのは京都の書肆であることから、京都の絵師であった可能性があることを指摘した。また、水谷不倒氏の『古版小説挿画史』以来、吉田半兵衛が元禄五・六年（一六九二・一六九三年）に逝去したとされていたことにより、それ以降に刊行された吉田半兵衛画の作品の多くが蒔絵師源三郎画であるとされてしまっていたが、現在、蒔絵師源三郎画であると考えられる作品は『人倫訓蒙図彙』の一作品のみであることを指摘した。筆者が比定した蒔絵師源三郎の画風は、吉田半兵衛の画風とは異なる稚拙なものであるため、おそらく、蒔絵師源三郎は、吉田半兵衛の弟子などではなく、本来は版本の挿絵を描く仕事をしていただけではなかったが、当時の職業について紹介するという『人倫訓蒙図彙』の趣旨や、本文中に「蒔絵師」の項があることから、本書の挿絵を描くことを依頼されたのだろう。この研究により、吉田半兵衛の作品をよ

り正しく整理できるようになった。

第四章は、「井原西鶴の画業について」である。先行研究において、蒔絵師源三郎画とされていた作品の中には、水谷不倒氏の『古版小説挿画史』で江戸時代前期の大坂の作家である井原西鶴画とされている作品と、同じ画風の挿絵が描かれているものがある。この、先行研究において井原西鶴画とされている作品については、小池藤五郎氏の『新資料による西鶴の研究』（風間書房 一九六六年）や、信多純一氏の『好色一代男の研究』（岩波書店 二〇一〇年）などのように、それらが本当に井原西鶴画であるかを疑問視する声もある。そこで、それらの作品が、本当に井原西鶴画であるか再検討した。現在、井原西鶴画とされている絵と同じ画風の作品は、版本は一五作品、画賛は五作品、絵巻は一作品であり、それらの作品について調べたところ、井原西鶴画とされている版本には、井原西鶴以外の作・編者が著したものもあることや、井原西鶴作・画とされている、大坂版『好色一代男』の本文と挿絵の内容には異なる点が複数個所存在することや、井原西鶴画とされている画賛はそれぞれに画風が異なっており、全てが同一人物による絵ではないと考えられることや、先行研究において専門絵師画とされている「西鶴独吟百韻自註絵巻」（天理図書館蔵）の絵には、井原西鶴画とされている版本の挿絵との類似点が複数個所存在することや、井原西鶴画とされている作品の絵の合計は八五七図に及ぶことや、宝永七年（一七一〇年）刊の、平家物語に仮託した浮世草子である『寛濶平家物語』第四巻第四話「微塵も絵図に違ぬ女」に、大坂版『好色一代男』の挿絵を描いた絵師についての記述があり、その中に、江戸時代前期の大坂の絵師である北峯正甫の名前が挙がっていることなどから、今後も、本当に井原西鶴画であるかということが再検討されてもよいのではないかということを指摘している。ただし、いずれの作品にも絵師の署名はないことから、現時点では、これらの作品が井原西鶴画ではないと断定することはできない。

第五章の「居初つなの著作と画業について」では、江戸時代前期の京都の女性書家・作家・絵師である居初つなの経歴と版本の作品を整理した上で、吉田半兵衛と居初つなが師弟であった可能性について検討している。吉田半兵衛と居初つなの絵を比較し、居初つな画の版本の挿絵と類似した構図がある吉田半兵衛画の作品の多くは、江戸時代前期の京都の作家である苗村丈伯作であるという特徴があることに気付いた。そこで、苗村丈伯の作品について調べてみると、構図が全く同一である、元禄十一年（一六九八年）刊の、『徒然草』の注釈書である『つれつれ草』（苗村松軒（丈伯）作・〔吉田半兵衛〕画）上巻第一図と、享保十一年（一七二六年）刊の、女性のための手紙の基本文例をまとめた往来物である『女筆琵琶海辺』（居初つな作・画）五〇丁ウの頭書部分の挿絵を始めとして、吉田半兵衛と居初つなの版本の挿絵には多くの類似点があることから、居初つなは、吉田半兵衛の絵を直接参照していた可能性が高いということを指摘した。また、それだけでなく、苗村丈伯と居初つなの作品は、本文にも類似点が複数個所存在するので、居初つなは、版本を著す際に、本文は苗村丈伯から、挿絵は吉田半兵衛から影響を受けていた可能性があることを指摘した。他にも、元禄三年（一六九〇年）刊の、『書翰初学抄』を模倣し、一二ヶ月における女性のための手紙の基本文例をまとめた往来物である『女書翰初学抄』（居初つな作）の改題本である、元禄十一年（一六九八年）刊の『女用文章綱目』と、元禄十二年（一六九九年）刊の『増益女教文章』は、作品の内容から、苗村丈伯作であると考えられることも指摘した。さらに、居初つなは、貞享～元禄年間

頃に、着物を着た女性たちと衣紋掛けに掛けられた着物を描いた「雛形絵巻」(奈良県立美術館蔵)を制作しているが、正徳五年(一七一五年)刊の、着物の意匠などが描かれた図案書である『雛形都商人』の作者であり小袖絵師である吉田光義は、作品の内容から、吉田半兵衛の跡継ぎであると考えられるので、居初つなは、実際に吉田半兵衛の周辺で絵を学んでいた可能性もあることを指摘した。これにより、吉田半兵衛の跡継ぎが小袖絵師として活動しており、少なくとも吉田家が二代続いたことが明らかになったが、その後は京都における吉田姓の絵師は文献上では確認できず、吉田半兵衛の影響を受けたと考えられる、江戸時代中期の京都の絵師である西川祐信などが人気を得た。

第六章の「坂内直頼の著作について」では、江戸時代前期の京都の作家である坂内直頼(法名は白慧)の経歴と作品について整理している。坂内直頼は、作品中に吉田半兵衛画であるという署名がある、貞享三年(一六八六年)刊の、当時の好色風俗を図解した浮世草子である『好色訓蒙図彙』の作者であり、前述の「雲堆雜著」において、吉田半兵衛が、坂内直頼に贋真にされていたことから、坂内直頼の墓誌の撰文を僧に依頼したことが記されているように、吉田半兵衛と親交が深かった人物である。本章では、坂内直頼作であると考えられるものを新たに三作品指摘している。一つ目は、貞享四年(一六八七年)刊の、京都島原の遊女評判記である『朱雀信夫摺』であり、坂内直頼の他の作品との構成・署名・筆跡・挿絵の類似や、本文中に、坂内直頼作である『朱雀遠目鏡』についての記述があることなどから、坂内直頼が制作に関わった可能性が高いと考えられることを指摘した。二つ目は、貞享五年(一六八八年)刊の、『清明通変占』を模倣し、安倍晴明作の算盤占を好色的な内容にした浮世草子である『好色通変占』であり、この作品には作者の署名はないものの、坂内直頼の他の作品との構成・署名・内容・筆跡・挿絵の類似から、坂内直頼作であると考えられることを指摘した。三つ目は、延宝九年(一六八一年)刊の、古今の情け深い女性を紹介した仮名草子である『名女情比』であり、この作品には、先行研究において、坂内直頼作とする説と、江戸時代前期の京都の書肆・作家である山本八左衛門作とする説の二通りが存在するが、『名女情比』と構成・内容が類似する『源氏御色遊』は、山本八左衛門が、坂内直頼作である『名女情比』の内容を好色的に改変したものであると考えられるので、坂内直頼作であると考えの方が妥当であることを指摘した。坂内直頼は好色本を含む様々な分野の作品を著していることから、自由な人柄であったことが伺える。吉田半兵衛も、家族を養うためにあらゆる仕事をし、好色的な浮世絵で人気を得ている。吉田半兵衛の作品を概観すると、好色本においては、特に、坂内直頼作であると考えられる、貞享三年(一六八六年)刊の『好色訓蒙図彙』と、貞享四年(一六八七年)以前刊の『好色旅枕』が代表作であったと考えられるので、坂内直頼との出会いは、吉田半兵衛にとって重要なものだったのだろう。

第七章の「苗村丈伯の著作について」では、第五章で、居初つなと関係があることを指摘した、江戸時代前期の京都の作家である苗村丈伯の経歴と作品を整理している。苗村丈伯(号は三徑)は、先行研究において、名字や号が類似した複数の別人と混同されているという問題点がある。そこで、苗村丈伯が、径山子・苗村介洞・苗村松軒と同一人物であるかを再検討したところ、径山子・苗村介洞とは別人であり、苗村松軒とは同一人物であると考えられることを指摘した。これにより、苗村丈伯の経歴と作品が正しく整理され、苗村丈伯の新しい著作が明らかになった。すなわち、苗村丈伯は、江戸時代前期の京都の作家であり、号は三徑・松軒など。元禄五年(一六九二年)刊の、女性

の教養のための辞書である『女重宝記』を始めとして、二四作品以上を著した。苗村丈伯は、作品の内容や、後世の文献から、近江国の医師であったと考えられるが、何らかの事情により致仕し、その後京都に上って、その教養によって数多くの作品を著して民衆の啓蒙に貢献した。特に、注釈書を多く著しており、いずれも、本文を上下二段に分け、注釈と吉田半兵衛風の挿絵を載せることで知識のない人でも内容が理解しやすいように工夫されているという特徴がある。このように、苗村丈伯の作品は、本文の体裁や挿絵の画風が意図的に統一されていると考えられることから、真面目な人柄であったことが伺える。女子教育に関心があった居初つなが、苗村丈伯の影響を受けていたと考えても、不自然ではない。

第八章の「中村孫兵衛の出版物について」では、前述の「雲堆雜著」において、吉田半兵衛とともに、坂内直頼の墓誌の撰文を僧に依頼したことが記されており、吉田半兵衛と親交があった人物であると考えられる、江戸時代前期の京都の書肆である中村孫兵衛の経歴および出版物を整理している。これにより、中村孫兵衛は、江戸時代前期の京都の書肆であり、名は富平、号は孫兵衛・昌陽軒。屋号は永原屋。書肆は高辻通雁金町（現在の京都府京都市下京区雁金町）にあった。父の跡を継いで書肆を営み、宝永七年（一七一〇年）刊の、自身が編集した、書名が似ている作品を弁別するための書目である『辨疑書目録』などの、六五作品以上を出版した人物であることが明らかになった。また、享保五年（一七二〇年）刊の、手紙ごとに、不適切な例文と適切な例文の二通りを示し、女性らしい言葉遣いを指南した往来物である『女中文章鑑』（〔居初つな〕作）の書肆である「中村孫三郎」という人物や、享保一一年（一七二六年）刊の、歌語の意味を説明した語彙書である『やまと詞大成』の作者である「中村氏富丸」という人物は、中村孫兵衛の跡継ぎである可能性も指摘している。さらに、坂内直頼の作品を概観すると、中村孫兵衛板であることが最も多く、吉田半兵衛画であることが最も多い一方で、吉田半兵衛と中村孫兵衛にはあまり接点が多くないので、吉田半兵衛と中村孫兵衛は、貞享三年（一六八六年）刊の『好色訓蒙図彙』（坂内直頼作・吉田半兵衛画・中村孫兵衛板）が出版されたことをきっかけに関係を持ったと考えられることを指摘した。ちなみに、中村孫兵衛は『辨疑書目録』を編集しているように学者肌の人物であったが、坂内直頼も博識な人物だったので、この二人は性格的な面でも気が合ったのかもしれない。これにより、当時の出版界では、作家・絵師・書肆が、公私ともに友好関係を持ちながら仕事を行っていたことも明らかになった。

第九章の「吉田半兵衛作品年表」では、現在、吉田半兵衛画であると考えられる二二三二作品を刊行年順に整理し、その業績を紹介している。吉田半兵衛に関係する人物を各章で詳細に調べたことで、各所で吉田半兵衛画であると指摘されていた作品だけでなく、これまで吉田半兵衛画であると指摘されていなかった作品なども集約し、吉田半兵衛の基本的な作品年表を作成することができた。このことから、版本の挿絵を描いた浮世絵師について研究する際には、その周辺人物について網羅的に調べることを有用であることを指摘したい。

そして、第十章の「おわりに」では、各章の結論および本論文の結論をまとめている。

本論文によって、吉田半兵衛のおおよその経歴と作品が明らかになった。また、奈良絵本・絵巻を制作していた居初つなが、後の浮世絵の祖となった吉田半兵衛の絵を参照していたことが明らかになったことで、吉田半兵衛と居初つなは、室町時代後期から江

戸時代前期にかけて制作された奈良絵本・絵巻と、江戸時代中期から後期にかけて制作された浮世絵の橋渡しとなった人物として、新たに位置付けることができるのではないだろうか。

Thesis Abstract

No. 1

Registration Number:	☐ "KOU" ☐ "OTSU" No. _____ *Office use only	Name:	Reina Ishida
Title of Thesis: Study of writers and artists in the early Edo period (江戸時代前期の作家と絵師の研究)			
Summary of Thesis: In the early Edo period, manuscripts and printed books were publishing. The manuscripts I'll be mentioning are naraehon and naraemaki, which are traditional Japanese picture books and picture scrolls. The printed books I'll be talking about are kanazoshi and ukiyozoshi, which are novels with illustrations. Previous studies have focused on the text of these works, but my research will attempt to clarify and understand them by focusing on the artwork. In this thesis, I focus mainly on Yoshida Hanbei and Isome Tsuna. However, I will also address some of the other artists, writers, and a publisher related to them and their work at the time. Yoshida Hanbei was an artist and Isome Tsuna was a female author as well as an artist. They were both active in Kyoto during the early Edo Period. Because their painting styles were similar, they are sometimes considered to be master and pupil. The chapters in my thesis are as follows: Chapter 1: Introduction Chapter 2: The Kyoto Artist Yoshida Hanbei in the Early Edo Period Chapter 3: The Gold Lacquer Artist Makieshi Genzaburo in the early Edo Period Chapter 4: An Artist Considered to be Ihara Saikaku Chapter 5: The Kyoto Artist Isome Tsuna in the Early Edo Period Chapter 6: The Kyoto Writer Sakauchi Naoyori in the Early Edo Period Chapter 7: The Kyoto Writer Namura Johaku in the Early Edo Period Chapter 8: The Publisher Nakamura Magobei in the Early Edo Period Chapter 9: A Chronological Table of Yoshida Hanbei's Works Chapter 10: Conclusion This thesis reveals that Yoshida Hanbei's Biography and Works. Also, I'll show that Isome Tsuna who was painting Naraehon and Naraemaki was influenced by Yoshida Hanbei who was the originator of ukiyo-e. This means that Isome Tsuna and Yoshida Hanbei bridged their artistic styles of naraehon/naraemaki and ukiyo-e.			